

---

# 春雷

sora tokiyuki

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

春雷

### 【Nコード】

N3977P

### 【作者名】

sora tokiyuki

### 【あらすじ】

盃に裏切られたはずなのに、おれは盃に手を伸ばしていた。絡めた腕に触れたリクオの肌は、熱かった。奴良の血を、確かに感じた。そのとき、自覚した。

リクオがいい。

## (前書き)

この小説は、WJ 連載中『ぬらりひよんの孫』（原作：椎橋寛）の二次創作です。

BL 要素を含みますので、BL に詳しくない方は、ご遠慮ください。

過激な描写は全くありません（書けません・・・）なので、年齢制限はありません。

原作一巻で鳩さんが蛇太夫さんに裏切られた直後のお話です。

月が陰る。

厚い雲が、闇夜を連れてくる。

ふいに、空が明滅した。

見あげた先に、屋根はない。蛇太夫たちの残した傷痕は、まだそのままだ。屋敷の大半は焼け落ち、いまもまだ、焼けた木のおいが静かに鼻腔を満たす。

風通しがよくなり過ぎだぜ。

再び、蒼い閃光の中に、かつて屋敷と呼ばれた無惨な姿が映し出された。化け物の巢に相応しいが、いまや化け物の影はどこにもない。

誰もいない。

夜を語らう相手は、もういないのだ。奴良系の一派として、ぬらりひょん様の百鬼夜行に付き従う仲間を、自分は失った。

『忠誠心・・・？ なんのことやら』

蛇太夫たちの言葉は、ひどく遠かったのに、頭上からのし掛かり、息もできぬほどにぎゅうぎゅうとこの身体を締め付けた。

盃は契りだ。

悪事を為し、本能のまま生きる妖怪の中で、唯一、信じるに値する行為、そう思っていた。強きものが上に立ち、弱きものが付き従う。当たり前前の序列の中で、互いに命を分け合う、特別な行為だと思っていた。

オレは弱い。身体はいつでも病に冒されている。そんなオレにも付いてきてくれるやつらがいる。オレはオレのできることで、やつらを守り、共に生きていく。だから盃を交わしたのだ。

なぜだ。

それほどまでに、自分という存在は仲間たちにとって疎ましかったのか。頭が上がりぬほど熱と痛みに襲われた夜、寝ずの看病をし

てくれた彼らの手は、偽物だったのか。互いの腕を絡め、交わした盃は夢だったのか。

問いたいことは、山ほどあった。

たかが十数しか抱えていない小さな一派さえ守れないほど、オレには力がなかったのか。オレの腕はそれほどまでに小さかったのか。いくら問うてみても、答えはなかった。

あいつらはもう、いないのだ。

抱えた片膝に額を押しつける。

あのとき、リクオが来なければ、消えていたのはオレの方だった。予定よりも少しだけ早く、この命は消えていたはずだった。信じていたものをすべて打ち砕かれ、最悪の状態で、闇に堕ちていただろう。

伸ばされた手は、やはり奴良だった。

『飲むかい』

盃に裏切られたはずなのに、おれは盃に手を伸ばしていた。

絡めた腕に触れたリクオの肌は、熱かった。奴良の血を、確かに感じた。そのとき、自覚した。

リクオがいい。

あいつが幼いころから、三代目になればいいと願い、できるだけ力添えをしてきたが、そんな望みとは違う。強烈な欲望が、オレの中を駆けめぐった。

生きたい。おまえのその姿をみたいから、オレは生きる。リクオに守ってもらうのもいい。意地汚く、生きてやる。リクオが総代に座るときまで、どんな手を使っても生き続けたい。

そしてそのときが来たら、そつとその黒い袖に触れよう。最後の血の一滴、羽の一本まで、オレはおまえのものだと、捧げよう。

ぼたぼたと重い音が、わずかに残る屋根を叩き始める。次の雷鳴とともに、激しい雨が押し寄せてきた。膝に埋めていた顔を上げる。

「春雷か」

肩に羽織った着物がするりと滑り落ちた。激しい雨が吹き込み、

肩を濡らす。水分を吸い、ぺたりと肌に張り付いたその冷たさに、ぶるりと身体が震えた。抱き寄せるように着物を纏い、倒れた壁でできた穴蔵へと入り込む。なんとか風雨はしのげそうだ。

穴から覗くように外をみる。リクオと交わした盃が二つ、かつて縁側だった場所に、ぽつりと置かれている。あのとき酌んだ酒はもうない。いまはただ、空からの恵みを一杯に受け、いくつもの水紋を作っている。蛇太夫と交わした同じ場所で、雨に洗われている。

『お体に障りますよ、鳩様』

蛇太夫の声が聞こえた気がした。

『あ、また熱が出てきたんじゃないですか？ まったくもう、そんな格好でうるうるしてるからですよ』

『ほらほら、早く布団に入ってください』

つい先日までここにあつた当たり前の風景が、ふいに蘇る。

なにかが胸に溢れた。憤怒なのか、遺恨なのか、愁嘆なのか。どうしようもない流れが身体の中を巡る。

もしオレがもっと強かったら、蛇太夫たちはいまここにいただろうか。

問うても仕方のないことだ。わかっている。それでも、幾度も繰り返す。そしてその度に、孤独を思い知るのだ。それが、リクオという絶対を手にいれた代償なのだから。

「弱っちくて、ごめん」

この声は、届いただろうか。

雨はまだ、盃を洗っていた。

(後書き)

少しでも気に入って頂けたら、嬉しいです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3977p/>

---

春雷

2010年12月14日21時49分発行